

アジア的生産様式論争の 拡大（続）1980-1991

福 本 勝 清

1964年、再開されたアジア的生産様式論争は、その後、60年代後半から70年代前半においても、フランスを中心に展開された。だが、70年代中葉、その流れに大きな変化が訪れる。70年代中葉に、ローレンス・クレイダー『アジア的生産様式』（1975）、マリアン・ソーワー『マルクス主義とアジア的生産様式の問題』（1977）が相次いで発表され、ウンベルト・メロッチ『マルクスと第三世界』（1977）が英訳された頃より、アジア的生産様式をめぐる議論は英語圏を中心として行われるようになる。

クレイダー、ソーワー、メロッチ等の著作は、アジア的生産様式の理論に関わる著作であり、マルクス主義歴史理論を直接問題にするものである以上、個々の歴史領域というよりも、マクロヒストリーに関するものであった。それに対し、1970年代後半以降、個々の国家あるいは民族の歴史に、アジア的生産様式概念の適用を試みる著作が現われる。個々のアジア的社会にアジア的生産様式論を適用した著作としては、1980年前後にはデヴィッド・エリオット（タイ、1978）、ティジェルマン（インドネシア、1980）、アヌバム・セン（インド、1982）、ディーター・アイヒ（インカ、1982）などの著作が相次いで刊行されている。

また、ソ連における1920年代後半から1930年代前半にかけての、中国社会へのアジア的生産様式概念の適用是非をめぐる論争——すなわち第一次アジア的生産様式論争——をまとめたケスラー（1983）もこの時期のすぐれた

労作である¹⁾。

1) 1980 年前後のアジア的生産様式論

1980 年代に入り、10 数年来のアジア的生産様式論争の成果が様々な領域において発表されるようになる。

ある国や民族の伝統社会にアジア的生産様式概念を適用できるかどうかに関して、①土地私有の不在、②国家、地方政府、共同体に指導された水利などの公共事業、③村落共同体の凝集性もしくは孤立性（その内部において工業と手工業が緊密に結びついているため）、④国家による小共同体からの剰余の収取、あるいは国家の経済高権など、アジア的生産様式の主要な指標が、その国の歴史に見出せるかどうかで最低試されなければならない。だが、それぞれの指標の理解をめぐる多くの議論があり、概念の適用それ自体も簡単なことではない。さらに、うわべだけの指標として見れば、土地私有、公共事業、村落共同体は、アジア的社会、古典古代、中世西欧のいずれにも存在する。もしくは、洋の東西を問わず、多かれ少なかれ、ほとんどの国の歴史に存在する。たとえば、土地私有は中国においては古代以来一貫して存在する。ポリスの神殿建設や古代ローマの水道や街道の建設も公共事業であり、西欧中世の教会建設や都市防衛のための築城も公共事業とみなしうる。あるいは、どんな社会にも公共の井戸や公道は必ず存在する。そして村落共同体については、農村の集落を共同体とみなせば、あらゆるところに存在する。とすれば、自らが研究するフィールドの、それぞれの国家や民族の歴史にアジア的生産様式概念を適用しうるかどうか、それぞれの指標が当該社会に見つかるかどうかの考察は、同時に、それらの指標が古典古代や、古ゲルマンおよび中世西欧社会において、どのようなあり方において存在していたのかをも考慮しつつなされなければならない、ということになる。

上記のアジア的生産様式論の著者のなかで、このような作業を行ないつつ、

個々の国、地域の歴史を叙述したのはティシュエルマンであった。なによりも、大きく文明を俯瞰した歴史観の中心にアジア的生産様式論があることが、ティシュエルマンの議論の魅力である。さらに、ティシュエルマンのすぐれたところは、古典古代や古ゲルマンおよび中世西欧社会と対比しつつアジア的社会の特質を明らかにしたのみならず、他のアジア的社会と比較しつつ、アジア的生産様式の東南アジア的型（タイプ）の輪郭を明らかにし、さらにそのタイプが、個々の東南アジア各国各地域において、どのように具現したのかについてまで言及している、などの諸点にある。

ティシュエルマンは、世界史的把握をもっぱらとする理論家たち、マルクス、ウェーバー、ウィットフォークなどから、マクロヒストリーの側から提起された世界史的把握と、ファン・ルール、バステイン、ベンダなどインドネシア史、東南アジア史研究の担い手たちから、その具体的な地域史、そのディテールを踏まえた世界史把握を、ともに継承せんとしている。

ティシュエルマンの文明の俯瞰において、まず原始共同体社会崩壊と資本主義成立の間の歴史において、西欧世界と非西欧世界を区別する。後者は、ローマから北京まで、といった言い方で表現されているように、大農業文明によって支えられた諸帝国に代表される世界を指している。彼は、北西ヨーロッパ（西欧）とそれ以外の地域の間に、歴史および文明の分かれ目があると考えている。前者は、社会経済的矛盾の発展と成熟に有利な歴史条件を有し、後者は、その条件を欠いているか、不十分にしか備えていない地域である。後者においてはローマ帝国やビザンツ帝国、あるいは中国歴代の大帝国が形成される²⁾。

この西欧とは区別された世界には、以下の特徴がある。①社会は農業社会であり、独立したローカルな農民共同体からの徴税に依拠している。そこで手工業は農業に強く結びついた使用価値の生産であり、交換価値を目指したものではない。②所有者である支配階級、王と貴族層は、農業の剰余生産物を領有し、賦役労働を徴発する。③商品生産と貨幣経済は、社会のすき間

において発達する。蓄積は、経済的劣位にある人民との不等価交換によって実現する。あるいは、直接的な略奪、高利貸し、農業生産物の一部の収取による。蓄積は、商品生産によってではなく、限られた市場における国内外における商品流通を通してなされる。④このような状況は生産的な意味での「資本」形成をもたらすことはない。⑤不自由労働の使用によって発生したマニュファクチャーは、支配国家によるあれこれの方法によって統制される。⑥このような枠組みにおいて、私的資本は大きな富を集積することはできず、国家に対抗する階級として、独立することはできない。⑦それゆえ、ただ西欧のみが、このような条件の組合せを有し、産業革命を形成するような資本主義的なブレイクスルーを可能にしえたのである (Tichelman, 1980 p. 16)。

それに対し、古ゲルマン社会から出発し、中世西欧に展開した社会は、以下のような特徴をもつ (p. 17)。

- 1) 海洋、河川、陸路などコミュニケーションの発展に向いているが、農業生産性の発展(成熟)には向かないエコ的(地理的気候的)環境。
- 2) a. ゲルマン人の中の、農業経営と土地保有の個人化に向いた、開放的な性格の社会経済的関係, b. 自由な保有権を有する自由農民の堅固な階級の存在。
- 3) a. 古典古代の遺産すなわち villa 屋敷(農場), 封建的傾向をもつ領主所有地, b. 都市の継続性と伝統の要素, ギリシア・ローマ的な政治的・法的文化。
- 4) 独立したイデオロギー装置としての、国家のなかの国家としての教会。
- 5) a. 分散した社会的、経済的、政治的権力すなわち相対的に弱い国家(中央政府)と統治権の分化, b. 国家に対し強力な経済的法的権利をそなえた所領の主である名望家の階級, 所有権を持ちかつ統治する階級は直接、最重要な生産手段である土地所有に基づいており、それらは直営地の経営に直接的な利害を有する。
- 6) a. 多かれ少なかれ、自治的な都市センター, b. 生産と通商のセンター

であり、前工業的私的資本の蓄積のセンターでもある。

- 7) a. 国家および封建領主とは独立して発展した都市階級、すなわち企業家、私的資本の所有者、b. 多かれ少なかれ独立した手工業者、c. 萌芽的な賃労働、プロレタリア階級。
- 8) その大部分は農奴だが、彼らはその剰余生産物を、直接に地方市場で処分することができる農民階級。

マルクス『諸形態』におけるゲルマン的共同体（本源的所有のゲルマン的形態）を踏まえたうえで述べられているこのような記述、および西欧文明の古層についての理解は、インドネシア（オランダ領東インド）で生まれ、オランダで育ったマルクス主義者として、インドネシア研究に従事したティッシュルマンが、自らのインドネシアや東南アジアとの関わりから体得した歴史理解に由来するものなのであろう。

非西欧世界は二つの地域に分かれる。すなわち、土地私有に基づき私有財産をもつ階級の発展の余地がある社会（ローマ帝国、ビザンツ帝国）と、特権層が国家に依存しつつ権力の集権化を伴う型の社会（東南アジア、中国などアジア的生産様式に支配されている地域）である。

北西ヨーロッパの封建社会との顕著に相違するアジア的社会の特質とは、次のようなものである。

- 1) a. 経済的政治的に優勢であったところの、非常に強力な国家と村落共同体——その大部分の剰余は国家によって経済外的手段によって搾取される——の間の基軸、b. 地理的気候的条件はしばしば、豊かな、あるいは灌漑により豊かにされた河川流域を含み、相対的に早く、農業労働の生産性と人口の、増大をもたらす。
- 2) 大部分自給自足的で孤立した村落共同体における、集団的土地所有と労働のエレメントは、長く持続し、また手工業と農業生産（主に使用価値に向けた）は強く結びついている。
- 3) 相対的な権力集中を伴った国家機構は社会的剰余の大部分の集中にも

とづく、すなわち地域を超えた社会的経済的、技術的組織的、社会的文化的任務（水の統制を含む）と結びついた権力集中。

- 4) 村落の境界のなかでは、直接的でダイナミックな個々の農民生産者と市場との関係は、非常に狭い範囲に限られ、その結果、農村の階層分解に向けた強い刺激に欠けることになる。
- 5) 国家権力の圧倒的優位は、都市の国家への従属において、国内外の貿易の独占傾向において、鉱山開発と工業生産において、体现される。都市を寄生的ポジションに縛りつけ、交換価値の生産と資本の蓄積を抑える状況の存在。
- 6) 特権階級の国家への極端な従属、つまりこれらの階級は彼らの収入と権力を、主に、直接的・間接的に、彼らの、国家の官職あるいは国家の代理人であることに負っており、私有財産に負っているのではない。
- 7) 孤立した村落共同体における直接生産者と、剰余の領有者の間の、直接的な対立の欠如、それゆえ生産関係は安定的である。つまり、この安定性は農民蜂起や貴族階級の国家権力に対する反抗によって、ひどく乱されるが、生産関係はつねにそれ自身を再生産させる傾向をもつ (pp. 18-19)。

さらに、ティシエルマンは、アジア的社会のそれぞれの地域の特質をつかむべく記述を続けている。

まず、日本については、アジア的諸関係の不在及び非アジア的国家によって特徴づけている。その理由としてヨーロッパ大陸に対する英国のような地理的な孤立を挙げている。それに対し、“アジア的”な中国は、農業文明として、前資本主義社会において達成された最も高いレベルに到達したとしている。ウィットフォーゲルを引きつつ、周代の社会的諸関係は、その村落共同体の集団的構造に結びついていながらもかわらず、なにほどこ封建的であったが、この「封建的」性格は、秦漢王朝の中集権的国家の力によって克服されることを阻止するほど、充分に強力ではなく、次第にばらばらにされるに

いたった（p.24）とある。さらに、アジア的国家の持久性についても言及している。アジアの社会構成においては、比較的限られた量の奴隷労働力は、賃労働の始まりを伴っていた。しかしながら、国家は、社会的に郷紳に依拠していたにもかかわらず、繰り返し、アジアの構造を切り崩すような新しい階級関係の成立に向けた動きに関して、それ自身の優位を主張できた。この状況は、ウィットフォールグが、「その最も早い時期から歪められた初期資本主義」と呼ぶところのもの以上は行かなかった。国家は経済的支配（至上権）を維持することができた。官僚制国家機構は、社会的に相当な発展と階層分解と同時に成長したが、階級間の権力関係の質的な逆転を阻止するには十分なほどに、しかし、アジア的国家としての抑圧的権力を和らげるには不十分なほどに（p.25）、しか発達しなかったと述べている。

次にインドについて、ティッシュルマンは、中東や中国のアジア的生産様式とは異なった社会であるとしている。「インドにおけるアジア的、非アジア的構造の関係は、中国のそれとは異なる」として、精巧に作られた（リクルートに関する客観的規範を備えた）官僚機構が欠けており、国家は統一を達成するには力がなかったこと、その遠心力は非常に強力であったことを挙げている³⁾。また、インド亜大陸は孤立的であるとはいえず、外国勢力や移民の動き、国際貿易、文化的影響に対して、より開放的であった。これらの諸要因が長期にわたる安定した統一に対し、好ましくない条件をつくっており、このような政治的統一の欠如は極端な社会的文化的異質混合性——それ自身が長期の不安定性に対し基礎となった——の継続を力づけたとしている（p.29）。

さらに、インド的なシステムは次の特徴を有する。①国家機構に巢食う役人たちも、時には地方領主の振りをして村落を支配し、直接農民の余剰を搾り取る。②アジア的国家の相対的な弱さのため、宮廷役人や徴税人は時々地方領主としての地位を強化することができる。だが、社会身分（layer）としての力を獲得することはない。彼らは従属する村落からより大きな部分

の剰余農生物を搾取し、その一部を、上級領主、さらに王侯にまで、手渡す。剰余生産物に対する競合は、当然、小農民にとっては害をなす (p. 30)。

最後に東南アジア社会に関して、ティシエルマンは、ベンダのアジア社会論を取り上げ、その要旨を以下のようにまとめている (p. 40)。①王権の中心は「聖なる王」に具現される。②地方ごとに分割されるような事態でも、本質は変わらない。③ベンダは、インド化された東南アジアの特性の重要な様相である「アジア的」なるものの最もすぐれた簡潔な要旨を与えている。④すべての権力と土地に対する権利は、聖なる王に付属する。王に属するものと王に属さないものの対照は、根本的なものである。王権は基本的に絶対的である。そこには土地所有は存在しない。封建的貴族の郷紳層も存在しない。王の役人は統治者によって任命される、宮廷の職務は非世襲的である。多少独立して行使される行政権力・地域権力から派生した、王に対抗する力は存在しない。⑤王に属する世界と王に属さない世界の間の懸隔は、土地所有あるいは他の社会的・経済的基準にもとづく等級化された権力による制度化されたシステムによって抑制されることはない。⑥ベンダは、王権の必要不可欠なものとして、首都の職業と保有（官職）のリストを挙げている。⑦ベンダによって特に言及されていないが、そのモデルに含まれている特徴として、i 持続する、既成の、実際に自給自足的な村落共同体の、多かれ少なかれ集団の特徴、ii 農業の剰余生産物の、君主および彼の役人による、搾取と中央集権化、iii 統治者の貿易と都市に対する支配、iv 大規模公共事業——しばしば水利領域においてではないが——の導入、v むしろ孤立した村落共同体に居住する農民大衆と、君主・大貴族の取り巻き・官僚的な上層階級との、直接的対立の不在、を挙げる。

以上の骨子からなるベンダのアジア的社会論は、完全にマルクスのアジア的社会論に合致する、とティシエルマンは述べる。

さらに、ティシエルマンは、ジャワおよびインドネシアの歴史を、二つの敵対によって特徴づける。即ち、一つには、ジャワの官僚階級的エリートと

村落共同体に生きる農民大衆との対立であり、中心（ソロ川あるいはブラントス川の流域に成立したジャワ国家）と周辺（ジャワ以外の島嶼部）の対立である。中心は水稻農業によって支えられ、周辺はインターアジア的な、あるいは無数の島嶼を介した交易に繋がっている（Tichelman, 1981: p. 37）。そうだとすれば、古代ジャワ国家は、ソロ川、ブラントス川流域の灌漑農業に依拠し、周辺部を介して到来したインド文化における王権思想を受容しつつ、成立したということになる。

以上のようなティシエルマン独特の歴史俯瞰とそのアプローチは、マルクス『諸形態』とは逆向きに叙述されている。マルクスにおいては、第一の所有形態（アジア的形態）が、所有の在り方において、まず他の二つの所有形態——第二の所有形態（古典古代的形態）、第三の所有形態（ゲルマン的形態）——と区別されたが、ティシエルマンにおいては、他の世界とは異なっているものとしてまず分離されるのは、古ゲルマン社会を含む中世西欧社会であった。次に残された世界から分離されたのは、古典古代であり、最後にアジア的社会の特質が述べられることになる。

マルクス『諸形態』において、アジア的社会内部の地域的な区分とその種差については、述べられていない。ティシエルマンはその未開拓の領域に切り込み、中国・インド・そして東南アジア社会の、アジア的生産様式あるいはアジア的社会構成における地域的な種差を提示している。参照に値する興味深い問題提起だと考える。このような試みは、それぞれの地域の研究者、専門家にとっては、門外漢による大雑把な試みに映るかもしれないが、誰かが提起しないかぎり、その可否について議論することさえ不可能である。また、アジア的社会とされる、中国、インド、東南アジアの間に、相応の種差を想定することは誤っていないと思われる。ここでは、ティシエルマンの積極的な提言を称えたいと考える。

2) 1980年代におけるアジア的生産様式論

i 人類学における動向

人類学におけるアジア的生産様式研究は、ゴドリエ等フランス・マルクス主義人類学の台頭とともに始まったといっても過言ではない。そのような関心の高まりは、1970年代アメリカの左派系の人類学誌に、フランス・マルクス主義人類学のレビューとともに、アジア的生産様式論の紹介が何度かなされていることからわかる。

人類学領域からのアジア的生産様式への取組としては、アンネ・ベイリー & ジョセフ・ルロベラ（編著）『アジア的生産様式：科学と政治』（Beiley & Llobera, 1981）が注目される。編者は、ともに人類学雑誌『批判的人类学』の寄稿者であり、1970年代よりアジア的生産様式および東洋の専制主義に関する論文およびメイヤスー、ゴドリエなどフランス・マルクス主義人類学に関するレビューを同誌に寄稿している。本書は、プレハーノフ、レーニン以降の、アジア的生産様式論争史においてトピックとなる論文を集めたものであり、論争に関心のある読者や研究者にとって便利なものとなっているが、ほとんどの論文は抄訳である。

本書は二部に分かれ、二人の編者による論文「アジア的生産様式：典拠と概念の形成」が第一部として掲載されている。第二部は、プレハーノフ、レーニンのほか、マジャールやヨルク、ゴードスなど1920年代後半から1930年代にかけての論争において、よく知られた理論家の論文が集められている。第三部は、ウィットフォーク『オリエンタル・デスポティズム』（1957）に対する反響に関してのものであり、東独やソ連の理論家のほか、非マルクス主義者であるトインビー、エバーハルトら水の理論批判が集録されている。さらに、スチュワードおよびプライスといったウィットフォークに好意的なものも収められている。第四部は、ヴェルスコップ、テーケイ、ゴドリエ

など、論争復活につながる中東欧および西欧のアジア的生産様式論が載っている。また、イタリアのジョルテやトルコのカイダーなど、これまで、論壇や雑誌などにおいて紹介されてこなかった人々によるアジア的社会論も掲載されている。ほとんどが抄訳であるとはいえ、一応、マルクス・エンゲルス以降のアジア的生産様式に関する主要文献に目を通すことが可能になったことになる。

1970年代末から1990年代初頭にかけて、主として発展人類学の流れのなかから、クレッセン、スカルクニク等により、初期国家に関連した政治経済システムの研究が引き続き組織的に行われ、『初期国家』（1978）、『国家の研究』（1981）において、アジア的生産様式に関する議論を取り上げている。アジア的生産様式への関心は、編集者の一人スカルクニクがチェコの古典古代史家ペチルカの学生であることが関係しているであろう。その後、クレッセン & ファンデルベルデ編『発展と衰退：社会経済組織の発達』（1985）、同『初期国家の経済システム』（1991）、などが刊行され、そのほかクラメリー & スチュアート編『アフリカにおける生産諸様式』（1982）、ビンズバーゲン & ゲシーレ編『旧生産様式と資本主義的侵食：アフリカにおける人類学的探究』（1985）などに、アジア的生産様式もしくはその別名たる貢納制的生産様式に関連した論文が掲載されている。

これら人類学論文集所収のなかで、アジア的生産様式に関連して注目されるべきは、クルミ・スギタ (Sugita, 1981) とグナワルドナ (Gunawardana, 1981; 1985) である。後者については、後節で詳述する。

クルミ・スギタ (Sugita, 1981) は、古代日本の歴史を、アジア的生産様式論の立場から読み解こうとし、生産諸条件（大地）先占の前提としてのローカルな共同体と、共同体所有の枠組を現す上位の共同体（superior community、ここでは総括的統一体と同じものとして扱う）の相互関係のなかで国家の発展を構想する。すなわち、外からの介入による国家の形成を構想するのではなく、内発的発展として初期国家を構想しようとしており、当然、そ

ここでは、停滞論的ディスクールの超克が意図されている。

上位の共同体もローカルな共同体も所与のものではなく、歴史的プロセスによって形成されたものである。また上位の共同体は、単に国家に等しいものでもない。上位の共同体とは、特殊な政治組織を意味するのではなく、異なったレベルの政治組織によって引き受けられる働きを意味するとも述べている。また、上位の共同体は、常々言われているような、個々の共同体の力を越えた大規模公共事業の担い手（条件）として出現するのではないとウィットフォーゲル・テーゼを批判する。むしろ、上位の共同体は、その存在の初めにおいて、小さな、多かれ少なかれ独立したローカルな共同体の生産と再生産の「想像」上の条件として出現する。この「想像」上の存在が、上位の共同体による、ローカルな生産単位（共同体）から剰余の一部の取得（extraction）を定める実際の社会関係の基礎となる。そして、この上位の共同体が生産の条件として関与するやいなや、それは別の存在の在り方を獲得する。すなわち、それはローカルな共同体再生産の物質的条件の一つとなる。上位の共同体の「想像」上の条件から「現実」の、物質的な条件への変容過程は、村落共同体の生成によって伴われていた（Sugita, p. 372）、と彼女は述べる。

以上の記述は、大和王権成立に先立つものとして述べられており、スギタは、日本古代における、初期国家成立の条件として、おそらくは「幻想の共同性」といったものの存在を重視しなければならないと述べているのだと考えられる。国家成立の前提として、治水灌漑など大規模水利事業の必要を挙げているウィットフォーゲルの水力仮説に対して、彼女は、稲作の到来以来、日本における水稻耕作は湿田中心であったので、大規模な土木事業を必要としなかったとし、それゆえ、初期国家の成立の契機としてそれを挙げることはできないとウィットフォーゲル仮説を否定する。そこから、新たな契機として、「想像的なもの」「幻想の共同性」が挙げられることになったのだと思われる。彼女が、上位の共同体の「働き」に留意していることを考慮すれば、

「想像的なもの」もまた、その「働き」に属するもの、あるいは働きを担うものと考えていたのかもしれない。

日本では稲作は早くから水田で行われており、水稻耕作に必要な水利施設、水路や堰なども早くから存在したことが指摘されている。なお、佐々木高明などの照葉樹林文化論においては、焼畑農法的な雑穀耕作の一種としての稲作が日本にもたらされたことを指摘しているが、それは縄文期に溯るものであり、その後、水田、水路、堰などからなる水稻耕作は弥生時代には成立していたと思われる。したがって、小共同体の枠を越えた水利施設の建設も早くから求められていたと思われる。それが、国家という形をとらなくとも、共同体連合や首長制的なもの、すなわちエンゲルスの共同職務執行機関であったとしても、水利の規模に応じて、充分機能していたと思われる。だが、総括的統一生成の契機の一つとして水利を挙げるのは、決して間違っているわけではない。さらに、総括的統一あるいは初期国家成立の契機として水利の必要が存在するのか、その成立の結果、より規模の大きな水利事業が可能となるのかというのは、卵が先か鶏が先かの議論でしかなく、相互作用として考える以外にないものであると考える。というのも、首長制や国家成立によって水利事業をさらに大規模化し得たとしても、それ以前において、水利事業が一定程度まで発展していなければ、規模を拡大すること自体も不可能だからである。水利事業の一定程度の展開は、それに見合った事業組織、指導系統の発達を促す。もし、そのように展開した事業の前途に、さらにより大きな展望が広がっていたとしたら、それを実現可能にすることに首長や王は躊躇しなかったであろう。というのも、水利事業の拡大は、穀物生産をより発展させ、事業主により多くの富（人手を養う糧）とより多くの追随者をもたらすからである。

彼女が幻想の共同性を象徴するもの挙げるのは、銅鐸・銅鏡や新嘗祭にみられるような豊饒や収穫を祈願する祭儀であり、主穀の豊穰に向け超自然的な力を呼び起こすこの種の儀礼に用いられる銅鐸・銅鏡などの祭器は、ロー

カルな生産単位＝共同体の間の儀礼的統一性を象徴する、としている。歌垣や国見も、このような観点から解釈されている⁴⁾。

そのような祭儀の担い手として、女性から司祭(＝首長)への転換が起こり、さらに貴族、そして最後に天皇が担い手として登場する。銅鐸に象徴される社会が比較的平等な社会であったのに比し、灌漑・排水を伴う水利が登場し、鉄器の普及とともに、共同体の階層分解を促していく。すなわち、共同幻想の担い手が首長層や貴族層に移行する時期だと思われる。

弥生末期、平地に大きな村が形成され、灌漑・排水および水路や堰などを備えた水利事業が登場する。それらの登場は、事業の組織者の地位を向上させ、先進地域において、司祭＝首長は3世紀を通して世襲的な貴族へ転化し(p.378)、さらに古墳時代には顕著な発展を獲得する。灌漑・排水の技術は、古墳をつくる技術でもあった。古墳期を通じて畿内を中心に大和国家が成立する。大和国家を通じて、貴族層は鉄器や貴重な他の財を独占する。

大和国家の発展とともに、貴族層は^{うじ}氏によってみずからを政治的に組織し、朝廷の諸職を占めるとともに、その臣下はそれに必要な負担を担うことになる。^{うじ}氏制度の拡大とともに、地方首長は中央貴族の氏の系譜に組み込まれその末端を占めるようになり、中央貴族と地方貴族が系譜的な結びつきを深めていく。住民は国家機構を担う首長や貴族に、それぞれ官職に応じ貢納しなければならなかった。やがて、地方住民が直接国家部門に従属し、貢納するようになり(tributary relation)、さらに6世紀、地方に屯倉が置かれ、地方の村落共同体から直接余剰を吸い上げることになる。それらのプロセスのなかで、貴族は国家官僚として役割を強めていく。

4～5世紀、灌漑・排水の複合システムの導入につれ、村落共同体は発展のプロセスを歩む。水田の拡大、移植の導入などにより大量の労働力が必要となった。それでも、共同体関係は、共同体成員の自然の領有の前提でありつづけた。村落共同体の拡大につれ、労働過程の再編や生産力の増大をともなった。農業作業は主に拡大家族によって担われたが、それ以前に比べ労働

は強化され、かつ共同体関係も強化された。

村落共同体が広範囲に存在するようになった4～5世紀は、貴族の発展の時期でもあった。5世紀末移行、小さな古墳が無数に作られたが、そのためにはより多くの農民が動員されなければならなかったが、それらの動員と古墳内の遺品は、村落共同体における階層分解の進行を示している。

共同体内や家族内における階層分解には、鉄器（生産手段）の有無、あるいは冶金技術の有無が関わっている。このような階層分解は家族の周りにそれに従属する者の存在を作りだした。

中央集権化された国家の成立前、日本には四種の生産関係が存在した。貢納制、共同体、従属関係（relation of dependency）、奴隷制である。奴隷は個々の家族に属するが、生産奴隷ではなかった。

中央集権的国家の成立後も、有力家族の蓄財、地方産業や交通のコントロールは続いた。それらは私的所有の発展を意味するのではないが、客観的生産条件の私的領有であり、土地の不平等なアクセスと農業生産物に対するコントロールによって勝ちえたものであった。

以上、スギタは上位の共同体——首長制あるいは初期国家——と農業生産の結びつきが、社会発展のプロセスにおいて、様々な社会変容をもたらすことを述べる。だが、水の契機を含めた政治支配の形成を論じながら、なおかつ、水の理論批判を掲げなければならなかった彼女の議論のスタイルからは、1980年前後のアジア的生産様式論においても、農業生産ということが「水」に関わるかぎり、それに触れること、あるいは、そのことを十分に論じることとは、以前と同様、なお難しかったことが窺える。「灌漑と国家の関係をテーマにすることが、ウィットフォーゲルとその労作への全般的な非難の結果として、身動きの取れない難局に陥ることは不幸なことである」（Sugita, p.383）、と彼女は述べている。1980年初頭においても、ウィットフォーゲル・パニックからまだ自由ではなかったのである。ただ、それでもなお、彼女の論文は、国家成立以前のアジア的生産様式における、小共同体と「幻想

の共同体」たる総括的統一体との水を介した関わりと、国家成立への内的発展のプロセスを述べたものとして、Claessen & Van de Velde (1985, p. 131) において、評価を得ている。

ii 『ジャーナル・オブ・コンテンポラリー・アジア』そしてテーケイ

1970年代後半以後、アジア的生産様式関連の書評を掲載してきた『ジャーナル・オブ・コンテンポラリー・アジア』は、その後も引き続きアジア的生産様式に関心を示している。1980年前後に、アレック・ゴードン「ジャワの社会経済構成の発展諸段階：1700-1979」(1979)、ディパンカル・グプタ「ヴァルナとジャーティ：インドにおけるカースト・システム——アジア的生産様式から封建的生産様式へ」(1980)、Nancy Wiegiersma「ベトナムにおけるアジア的生産様式」(1982)、さらにテーケイの二つの論文「アジア的生産様式の解釈における幾つかの争点」(1982)、「第三世界発展問題の基礎について」(1983)が掲載されている。

ゴードン (Gordon, 1979) は、シャイレンドラ朝が成立した8世紀から、東インド会社(オランダ)による植民地化が始まる17世紀までのジャワ史をアジア的生産様式に基づくものとみなしている。具体的には、中部および東部ジャワの、マタラム、クディリ、マジャパヒト、マタラム・イスラムなど、ソロおよびプランタス川流域の水稻耕作を中核とした諸王朝について述べている。それらの諸王朝の基本的収取は農民からの税と賦役であり、土地を世襲的に所有する貴族階級は存在せず、貴族は王の従者か代理人であり、その見返りに采地を受け取るが、その土地は譲渡されたものではない。封建的所有は存在しなかった。村落レベルにおいては、土地は共有であり、村がコントロールしており、村外の者には譲渡できない。新来のものは、まず村民の土地を小作することによって、その権利の確立を開始する。支配者による剰余(生産物および労働)の搾取にもかかわらず、村落は事実上自給自足的であった。

このようなアジア的社会的特質は、東インド会社によるジャワ植民地化の進行のもとでも変わることはなかった。東インド会社は、外に向かっては貿易を独占し、内に対しては旧統治者の役割を引き受け、最上位の「アジア的」国家のように振る舞った。

18世紀末、フランス革命の余波を受け、オランダにバタビア共和国が成立し、東インド会社は解散させられる。1811-16年のイギリスの占領統治の後に復活したオランダ植民地政庁は、1830年以降、悪名高い強制栽培制度を実施する。村落の土地5分の1を砂糖キビなど政府指定の作物栽培に振り向ける強制栽培制度のもと、搾取がいっそう強化され、農民の生活水準は引き下げられた。だが、それでもなお村落は自給自足的でありつづけたが、同時にそのような村落のアウタルキーの最後の局面でもあった。ゴードンは、以上のような19世紀中葉のジャワの社会構成を、いまだアジア的な収取様式を引き摺ったものと見ているようである。

1870年以降の近代プランテーション経済の導入以降、村落のアウタルキーは崩壊する。オランダ帝国主義の市場として、村落における手工業は大きな打撃を受けるとともに、税の金納化に伴い、農民の多くは土地を失う。村落の土地共有に代わり、土地私有が支配的になる。だが、近代工業の勃興や近代都市の興隆もなく、土地なし農民はそのまま農村に滞留する。すなわち、プランテーションに「自発的」に雇われるしかない労働者の誕生であった。このようなプランテーション経済の基礎をゴードンは、資本主義的な生産様式と土着経済の接合であるが、自然なあるいは自由な経済のそれではなく、経済外的強制の結果だとしている。

ゴードンが描く17世紀以降の植民地支配のもとでのジャワ社会については、やはりサミール・アミン的な接合論による理解がもっとも説得的であるように思われる。アジア的生産様式にもとづく社会構成が植民地化により、資本主義的世界システムに組み込まれ、周辺的な資本主義的構成体へ転質させられる。オランダの株式会社である東インド会社が、彼らによって征服さ

れたジャワ社会において、旧来の支配者の役割を引き受け、アジア的國家の君主であるかのように振る舞う。そこに、支配的な資本主義的生産様式と従属的なアジア的生産様式の接合が存在する。そのような接合のもと、従属的構成体から支配的構成体への大きな余剰の移行が長期にわたり持続するとともに、きわめてゆるやかに、従属的構成体が資本主義的なそれへと変容していく、ということになる。

Wiegiersma (1982) は、植民地以前のベトナム社会をアジア的生産様式の視点から記述したものである。簡潔に言えば、前半を理論編、後半をベトナム編と呼ぶことが出来る。論文の前半はアジア的生産様式の理論的な側面を中心に、後半において、ベトナム社会の具体的なアジア的性格に焦点を置いて記述している。Wiegiersma はマリアン・ソーワーやエルネスト・マンデルらの理論的説明を援用しつつ、アジア的生産様式論を展開しているが、それはアジア的生産様式を、皇帝・中間層（皇帝と農民を媒介している官吏・郷紳層）・農民のヒエラルヒーからなるベトナム社会に即した理解を容易にするものへと誘導するものになっている。特に家族の長（家父長）の支配を媒介する役割に重点を置いた説明をしている。

後半のベトナム編において、まず、土地は皇帝のものであること、あるいは皇帝は国土およびそこから産出されるものに対し圧倒的な権利を有していることが述べられている。だが、村落もまた土地に対する大きな権利を有する。その限りで、村落はその土地をコントロールしているといえる。村の土地は家族の土地と共有地に分かれる。家族の土地は、それぞれの家族が税を納め、共同体の義務を履行するかわり、村落の土地に対する権利を保持し続ける。村落のもっとも重要な土地は稲作地である。

国家＝中央政府は、行政機構を通じ村落経済に関与する。すなわち、稲作に不可欠な水利施設、ダム、運河などの築造・維持管理のために、地区、省を跨るレベルにおいて、水利事業を組織する。それらは、官吏の監督のもと、村落をベースに、農民を動員して行なわれる。

皇帝は、皇帝と税や賦役などの負担者である直接生産者＝農民との間に介在する中間層（官僚や村役人）が、農民のあがり（上納）を着服したり、私的権利を拡大しないよう、農民の権利を保護し、中間層を抑圧する。農民、具体的には、それぞれの家族の長（家父長）は、それに応えて皇帝への忠誠に励むことになる。Wiegersma は、エンゲルス『起源』における社会発展＝私有財産の発展の見地と整合を図るためか、あるいは社会発展＝階級分化の見地からであろうか、ベトナムにおける私的所有の展開を跡づけようと試みている。村落共同体の土地に対する強いコントロールにもかかわらず、伝統的な生産様式のもとでも、階層分解が進行し、家父長による家族財産に対する権利が確立し、耕作権を梃子に、有力者の村落の土地に対する私的権利が伸長する。Wiegersma は、それを資本主義的社会における私的所有とは異なるが、アジア的生産様式のもとでの私的所有と呼び、それが共有を侵食していくと考えている。

テーケイ（Tōkei, 1982）は、1981 年の東京（明治大学）およびハノイにおける講演がもとになっている。1964 年のアジア的生産様式論争勃発時の当事者として、ゴドリエなどパンセ・マルクシストとともに、アジア的生産様式論の旗手として、論争を牽引してきたテーケイであったが、教条的なソビエト・マルクス主義における歴史理論、とくにスターリンの歴史発展の五段階論に対する闘いにおいては、同一陣営にありながらも、すでに、当初より、ゴドリエらとの間には微妙な見解の相違があったことが知られている。本論では、特に、ゴドリエらが、①アジア的生産様式が封建的生産様式へ発展する可能性を示唆した点、さらに②アジア的生産様式における「アジア的」の名称が実際に含まれる内容に比べ狭すぎるので、より広い、適切な名称に変えた方がよい、とした点を批判している。この 2 つの批判点は、テーケイのマルクス『諸形態』の理解の水準を示している。すなわち、封建的生産様式の根底にあるものは、マルクスが本源的所有のゲルマン的形態（ゲルマン的共同体）の個人的所有に込めた、共同体成員の強い所有権であり、それゆ

え、直接生産者の土地私有が成立したとし、その直接生産者を土地（生産手段）から引き離す原蓄のプロセスの進行が可能となった⁹⁾。それに比し、本源的所有のアジア的形態（アジア的共同体）においては、そもそもそのような強い所有が成立しえない以上、土地貴族は農民を土地から引き離すことではなく、国家の代理人として農民から地租（税プラス地代）を徴収する権利の獲得を目指すことになった。すなわち、アジア的国家が弱まった時、たまたま起こる疑似封建化を封建化と取り違えることは、マルクスの封建制理解に反していると述べると同時に、アフリカやラテン・アメリカにおけるアジア的生産様式の名称を「アフリカ的生産様式」や「アメリカ的生産様式」に変更することは、その「アジア的」に込められたマルクスの主旨を歪めることになるかと警告している。そこから、1970年代に強まってきた、マルクスの思想をヨーロッパ中心主義として批判する潮流に対しては、その批判は当たらないと述べている。

iii ガリソ編『前資本主義社会の構造と文化』（1981年）

直接アジア的生産様式に関わるものは、以下の論文である。

- ① ティシエルマン アジア的生産様式についてのテーゼとジャワの例
- ② スカラブリノ Scalabrino 循環的歴史と直線的歴史：生産様式，社会構成と古代ベトナムの歴史
- ③ ヴァルデラマ Varderrama アンデス文明における前資本主義的構成
- ⑩ イェラシモス Yerasimos アジア的生産様式とオスマン社会
- ⑪ セルテル Sertel トルコ社会の発展と構造の解釈
- ⑫ ケッディ Keddie 中東における前資本主義的構造
- ⑬ ベン・アリ Ben Ali 植民地前モロッコの生産様式同定の試み

上記論文のなかで、①は先ほど紹介した Tichelman (1980) の要旨にあ

たる。②スカラブリノは、ベトナムにおける生産様式および社会構成体に関する議論を紹介しているが、どのような呼称を用いようと、農業共同体、水利、国家といった「アジア的」なタームによって議論されていることがわかる。③ヴァルデラマは、メトロー Métraux やムラ Murra を参照しつつ、先コロンブス期のアンデス社会の政治的・経済的・社会的システムが、アイユ＝農業共同体にもとづく社会であること、農業共同体アイユの上に、上位の共同体としてのタワンティン・スウユ（インカ帝国）が組織されていると述べており、農業共同体アイユの剰余を収取するタワンティン・スウユの描写は『諸形態』の総括的統一体の記述を想起させるものとなっている。⑩イエラシモス、⑪セルテルは、いずれもオスマン社会の性格規定に関わるものである。オスマン朝下の社会構成を如何に規定かについては、ビザンツ帝国のそれとともに、難しい問題を含んでいるが、イエラシモスはセルジューク朝以来のアジア的社会への傾きをオスマン朝の社会に認めているようである。それに対し、セルテルは、オスマン社会の社会経済構造は、アジア的生産様式にもとづく社会よりも進んだもの、より複雑なものとなししているが、さりとて封建的生産様式であるとは考えていないようである。オスマン朝を含めた中東地域を考察の対象としている⑫ケッディは、「封建的 feudal」という言葉は、ヨーロッパと日本という、二つの地域にのみ使用すべきだと述べる。だが、その他のアジア的な社会はみな同じかといえば、そうではない。たとえば、中国と中東は、中核部に灌漑を中心とした農業社会があり、周辺部に砂漠および山岳地帯があるという点は同じでも、部族社会および遊牧民族の比重において、全く異なった社会を構成していると述べ、この種の問題の難しさを指摘している。⑬ベン・アリは、中世モロッコ社会の種々の要素を、アジア的生産様式、貢納制的生産様式、封建的生産様式の視点からそれぞれ分析しているが、権力や土地資産の分散を封建的であると勘違いをしているように見える。

iv Diptendra Banerjee 編『マルクス主義理論と第三世界』

本書は1983年3月、Burdwan大学におけるマルクス死後百年を記念し「マルクス主義理論と非ヨーロッパ世界の研究」をテーマとして開催された国際学術大会に提出されたペーパーをもとに刊行されたものである。収録された論文は15本であるが、アジア的生産様式に関わるもの、それに関連したものは、以下の5篇である。

- ① ディプテンドラ・バナージー 前資本主義的生産様式の理論研究
- ⑤ Jakšić マルクスの生産様式理論：植民地主義の問題と低開発
- ⑥ ルバズ Lubasz マルクスのアジア的生産様式概念：発生的分析
- ⑦ ディプテンドラ・バナージー マルクスとインド村落共同体の‘原’型
- ⑧ ハーバンズ・ムキア Mukhia マルクス、資本主義以前のインドを論ず

1983年は、マルクス没後百年の年であり、各国において、あるいはそれぞれの領域において、生誕百年を祈念する行事が行なわれた。なかでも本書は、マルクスのアジア的社会論に関する、1980年代を代表する論文集といえる。

戦後一貫して、ソ連の影響が強かったこともあり、また、自らの歴史はヨーロッパと異なることはないとする理論家、研究者が主流であったインドにおいては、アジア的生産様式はつねに否定的に扱われていたといわれる。また、イギリスや日本などインド以外の国々のインド研究者も、おおむね類似した見解をとっていたと思われる。だが、それにしても、植民地以前のインド社会が、コサンビーやシャルマが言うような、封建社会であったのかどうか、議論の余地は十分に存在した。同年に刊行されたバイアーズ&ムキア T. J. Byres & Harbans Mukhia『封建制と非ヨーロッパ社会』(1985)

は、その疑問を正面から問うものであった。この論文集に寄稿しているバートン・スタインは、「分節国家」論の提起者として知られるが、その分節国家論自体が、インド封建制論への批判として提起されたものであった。オーレリー（O'Leary, 1989）にみられるように、インド封建制論は、アジア的生産様式否定論と一体であり、その後も根強く、インドを対象とするマルクス主義の間では、主流の地位を保ち続けている。

だがアヌパム・セン（Sen, 1981）のような例外もある。彼の最大の関心は、何がインドの資本主義化を阻止したのか、もっと焦点を絞れば、原蓄を妨げたものはなにかである。彼によれば、インド社会は原始社会の崩壊後、奴隷制も封建制も構成されず、アジア的生産様式が成立し、そして、そのアジア的生産様式は東洋の専制国家をもたらしたが、それが、諸階級の成長の足かせとなった、とするものである。

センは、西（封建的生産様式）と東（アジア的生産様式）の経済システムを対照的なものだと見ている。ヨーロッパでは農民や農奴の搾取強化、商人資本の土地への投資、およびその後の農業の商業化は農業部門における剰余を増大させ、農民の一翼を土地なしの賃金労働者に変えた。生産関係、つまり領主の土地と農奴に対する所有権の承認は、ヨーロッパでは、土地から生産者を引き離すことにおいて、また領主と農奴の間の敵対的な関係を作り上げることに、根本的なものである。それに比し、インドでは、貴顕の者が、土地に対する所有権を持たないという事実は、彼らの労働手段から生産者を引き離すことを不可能にする。彼らの役割は、徴税に限られる（A. Sen, p. 15）。

インドにおける資本の弱さは、三つ要因に由来する。まずは、村落共同体における農工の結合である。次に、領主の土地に対する法的権利の不在は、ブルジョアジーが彼の労働手段（土地）から生産者（農民）を遠ざけることを不可能にする。最後に、政治権力分散化の不在は、ブルジョアジーがいまだ権力を有する国家——時には衰退期における国家——から課せられた制限

を克服することを難しくする。

これは、極めて古典的なスタイルをとった、インドを対象としたアジア的生産様式論である。だが、インド研究者のなかで、センのごとく、マルクスのインド論をそのまま引き写したかのようなアジア的生産様式論を唱えるものは、極めて少ない。

『マルクス主義理論と第三世界』の編著者バナージーも、インドのマルクス主義研究者のなかでは、その数少ないアジア的生産様式論者の一人である。巻頭論文「前資本主義的生産様式の理論研究」においてバナージーは、アルチュセール以降の、経験や歴史に対し理論の優位を主張する傾向を批判し、その具体的な対象として、ヒンデス&ハーストのアジア的生産様式否定論を批判している (pp. 15-16)。

ヒンデス&ハーストは、アジア的生産様式における基本的収取である租税＝地代 (tax/rent couple) は、国家の一般的な徴税と区別された、特定の収取様式ではないので、アジア的生産様式は独自の生産様式であるとは認められないと主張していた。問題は国家の経済的収取に対する関わりをどのように見るかであった。バナージーは、ヒンデス&ハーストなど、アジア的生産様式における剰余の収取機構の決定に関する、政治的審級の統合 (組込み) を拒否する理論家たちが、他の前資本主義的生産様式、とくに古典古代的生産様式における基本収取の性格づけにおいて、市民権 (citizenship) を介した剰余の収取として、やむをえず、説明していることを指摘している。正しい指摘である。古典古代における基本収取が、彼がアテネやローマの市民権を有するかどうかによって規定されていることは紛れもない事実であった。古典古代における私的所有とは、本来そのようなものであった。また、公有地 *ager publicus* に対する権利もまた彼が市民権を保持していることによって生じたのであった。そこから、資本主義社会 (近代市民社会) における国家と市民社会の分離を経た、あるいは政治と経済の分離を経た所有観を、そのまま資本主義以前の社会に直接適用することの誤りが理解できるはずであ

る。プリミティブな社会における初期国家の発生は、様々な経済装置、経済諸関係と絡みつつ、それらと未分化なものとして、生じたのであり、とりわけアジア的社会においては、国家は直接に経済的な機能を担いつつ登場した。それを機械的に政治と経済に振り分けることは不可能であり、かつ無意味であった。また、生産様式概念の規定において、国家や政治の関与や影響があれば、それを上部構造による下部構造の決定、あるいは上部構造の下部構造に対する優位性として捉え、唯物史観に反すると考えるのは、長い間、ソ連流マルクス主義に馴らされた、ひからびた思考方法の残滓でしかないというべきであろう。

バナージーは、マルクスはその晩年まで資本主義的生産様式との対照から前資本主義的生産様式に関心を持ち続けたことを指摘する。彼は資本主義社会と前資本主義社会との対照において、後者の諸生産様式の規定には、経済的なエレメントばかりでなく、経済外的な、あるいは非経済的なエレメントもまた重要なものとして含まれることを強調する。そうである以上、資本主義に先行する諸生産様式の性格を理解するためには、それぞれの生産様式に関して、より具体的な、歴史的、経験的なデータが集められ、分析されなければならない。資本主義社会に関する研究とは異なり、それに先行する諸社会のデータそれ自体が不足しているからである。とくに、旅行者の手紙や植民地行政官の資料に頼っていたアジア的社会については、いっそうそのことが当てはまる。すなわち、資本主義に先行する諸生産様式に関する理論的検証は、現実の、多種多様な、経験的なデータの検証にもとづくもの、それらに依拠したものでなければならない、と。

これらの記述を通し、経験的なもの、歴史的なものに対する強い留意が窺える。おそらく、このバナージーの主張は、アルチュセール革命以降の、理論の経験に対する優位性の強調に対し、理論的实践における個別的なもの、具体的なもの、経験的なものの復権といったものが意図されているのだと思われる。

資本主義に先行する諸生産様式の性格規定に関して、バナージーは、マルクスの遺稿ともいふべき『コヴァレフスキー・ノート』における著名な一節、ムガル期インドが封建的であるかどうかに関して、封建的であることを認めるコヴァレフスキーの議論を、マルクスが逐一取り上げ、厳しく批判したことを、紙幅をさき丁寧に紹介している。マルクスがインド封建論の疑点として示した問題は、いずれも経済外的、非経済的なエレメントがからむものである。たとえば、インド社会には、農奴制、「土地の詩化」(Bodenpoesie)、領主の司法権およびそれにもとづく領主による農民保護などが、いずれも欠けており、それらが欠けた社会を封建制にもとづく社会だとはいえないとマルクスが考えていたことを強調している。

マルクス主義の生産様式規定にとって農奴制は経済的エレメントであるが、本来は農民の領主に対する個人的な従属であり、純粋に経済的な行為であるとはいえないものであった。農民あるいは奴隷が領主の土地を耕すという行為は、この従属関係のもとにおいて生じたのである。

これらは、マルクス主義にとり封建的生産様式、封建的社会構成とは如何なるものかを示唆している。インドにおけるマルクス主義歴史研究においてインド封建論が主流であることを考慮するならば、このバナージーの観点は、主流派を暗に批判しているともいえる。

バナージーの第二論文「マルクスとインド村落共同体の‘原’型」は、アジア的＝インド的共同体を発展の相において把握しようとしたものである。だが、バナージーが、アジアの共同体における原初的共同体から発達した共同体への展開を跡づけたとしても、それが、ヨーロッパの村落共同体のような、私的所有者からなる村落共同体への発展とみなすことはできない。たとえば、インドの共同体が原初のものよりも発展していたとしても、せいぜいロシアの農村共同体＋カーストといった段階に留まる。ましてや、中世西欧に見られる、農民分割地所有に象徴的される、直接生産者の小経営的生産の力強い発展などといった局面は現れない⁶⁾。そうであるかぎり、マルクスの述

べるインド村落共同体は、やはりプリミティブなものという評価にならざるをえないであろう。

ハーバズ・ムキーア「マルクス、資本主義以前のインドを論ず」は、マルクスのインド論を論じたものであり、マルクスのアジア的生産様式にもとづくインド理解に疑問を呈している。以下のムキーアの観点は、インドにおけるアジア的生産様式否定論に特徴的なものである。

まず、アジア的生産様式の特徴として、①国家が担うところの人工的灌漑、②土地私有の不在、③孤立した村落社会と、農業と手工業の結合による自給自足と自然経済、④商品流通を担う都市は寄生的である、⑤それらに君臨し、貢納や租税の形（地代とは区別されない）で剰余を収取する専制国家、が挙げられるが、これらの特徴は、マルクスに先行する以下の諸著作の影響を受けている。

- ① 水利における国家の役割：アダム・スミス
- ② 土地私有の不在と君主の至上権：ベルニエ
- ③ 孤立した村落社会とアウトルキー：マーク・ウィルクス Mark Wilks
- ④ 国家の統治権と地代と租税の統一：アダム・スミス、ジョーンズ

これらのアジア的生産様式の指標のなかで、ムキーアはまず、人工灌漑を国家が担うことに疑問を呈する。インド史においては大規模な灌漑もあったが、小規模で主に個人のイニシアティブによるものが多いと主張する。だが、1853年6月6日のエンゲルスのマルクスへの手紙では、人工灌漑は中央政府か、地方政府か、村落共同体の仕事であるとある。国家のみが責任を負うとは書かれていない。もし個人のイニシアティブによる灌漑が、家族経営を営む個々の農家が所有する井戸や小さな溜池によるものを指すならば、そのような農家が、社会における剰余の主要な供出者であるかどうかを問わねばならない。小規模灌漑によるものだから、古典古代世界や古ゲルマン社会の

ような個々の家族による小経営が成り立つと考えるのは誤りある。

竜骨車や撥ね釣瓶による小規模灌漑の場合においても、河川やクリークのような水路を前提とする以上、個々の農家のみによって完結する水利設備とはいえない。河川やクリークのような自らの耕地を遥かに越えた規模における水利施設とその水制御を前提としている。また、天水田も、自分の田に降る雨によってのみ、水田が営まれるのではなく、天水田とはいえ、自分の田の集水域は、必ず自分の田よりも大きい。つまり、何らかの形で、他人の土地、あるいは共同体の土地を経て水は集められる。その点において、アジア的社会の農業は、古典古代世界や、古ゲルマン社会の農業とは異なる。農業における水の必要性が、個々の家族の経営においても、少なくとも共同体の介在を前提としている。すなわち、水利施設の建設、あるいは維持・管理のための、「共同体のための必要労働」、あるいは「共同体のための賦役労働」を前提としている。そこに、共同体の首長がその成員に労働を強いる契機が潜む。専制への契機ともいうべきものである。

一般的に考えれば、支配者にとって、直接生産者からの剰余の収取は、安定したものでなければならず、そのうえ、農民の手もとに残された収穫によって農民の家族の再生産が行なわれなければならない。それを考慮すれば、無灌漑耕地の収穫から、支配階級が期待するような安定した剰余の取得は望めないことは理解できよう。アジア的社会の支配者たち、すなわち、官僚・郷紳・常備軍などを含む膨大な支配層を養うような巨大な剰余の収取は、アジア的社会のもとでは、無灌漑耕地からの収奪に依拠することはできない。逆に言えば、社会の主要な剰余の担い手である小農民が、自己の耕地に降る雨だけによって経営しうる場合（社会）においてのみ、あるいは、その雨に依存する井戸や溜池によって水を補給できる場合（社会）においてのみ、農民たちはアジア的社会の呪縛から逃れることができる可能性を持つ。

また、中世や近世に水利技術の革新が行なわれ、個人のイニシアティブにより灌漑が行なわれるようになったとしても、それが、社会システムや政治

システムの型を変えるわけではない。とくに、政治システムにとって、古代における首長制や初期国家の時期、あるいはその後の歴史の範型となった最初の専制国家において、如何なる水利が行なわれていたのかが重要である。

ムキーアは灌漑における個人の主動性 initiative を重要視するが (Mukhia, 1985. p. 277), もしそうだとすると, そのような灌漑農民によって, 支配階級が養われていたことを主張しなければならない。そうでなければ, 説得力をもたない。重要なのは, 水利建設における賦役を誰が引き受けるかということである。それは誰がどのように命じ, 現実の工事を指揮し, 建設後は維持管理するのか, ということである。ウィットフォークルの水力仮説を批判するあまり, 小規模水利あるいはローカルな水利建設であることを強調することがよく行なわれている。だが, 小規模ならば問題がなくなるわけではない。水利のための労働が家族や親族組織によって担われている場合は別として, 共同体の規模で行われる場合, とりわけ共同体の規模を超える場合は, 必ず共同労働の徴集と指揮の問題が生じる。

大規模水利でなくとも, アジア的社会の農民たちは水を契機として共同体のための賦役労働に従う習慣が身についている。そこから, 首長なり, 王なりが, 公共の利益を名目として動員を図れば, 農民たちは賦役に従わざるをえなくなる。デスポティズムは, それを温床として育まれる。

ムキーアの議論, つまりマルクス・エンゲルスが, インド農業における, 個人のイニシアティブによる水利を無視しているとの批判は, それ自体としてはまっとうなものだが, この種の議論の欠点は, 水利建設における労働を誰が引き受けるのか, そしてその動員を誰が命じるかを問題にしていないことである。たとえば, マルクスが共同労働からなる水利事業の東西の相違に言及した時, 西方では, 私的エンタープライズの連合によって, 大規模な建設が可能であるが, 東方ではそうではなく, 政府権力の強制によって動員された農民の協業によるのだと述べているところに, マルクスの理解がよく表れている。つまり, 西欧中世では, 私的経営が自発的な連合を結ぶことが促

進されたが、東洋では文明があまりにも低く、また地域があまりにも広大で、自発的な連合を生み出さなかったため、上位の権力が介入することになった(「イギリスのインド支配」)というわけである。

ムキーマはまた、インドにおける土地私有の不在、自給自足的村落共同体、変化なきインド社会等々、マルクス・エンゲルスの言説を点検し、その上で、インド農業の発展を論じている。さらに、スードラの直接生産者としての成長を強調し、それは、7世紀以来の新しい生産様式=小経営的生産の成立を示していると述べる。たしかに、停滞を slow development と言いかえれば、気が済むなら、そうすべきだ。少なくとも、それを前提にインド史における生産様式論や社会構成体論にじっくり取り組むべきであろう。ムキーマの良い所は、シャルマたちのように、無理に解釈して、上記の新しい生産様式を封建制の成立だなどと言い立てないところである。

だが、どう考えても、この新しい生産様式が、以前の生産様式とは異なるものとはいえないであろう。また、このような農民と国家との関係も変化したとはいえない。たとえ、新しい変化であっても、新しい生産様式とはいえず、同一の生産様式のなかの、新たな展開、あるいは新しいウクラードの形成と云うべきであろう。小経営的生産様式の発展自体は、アジア的、古典古代的、封建的生産様式においても、それぞれ同様に展開されるということを忘れてはならない。

ムキーマの、所有権以上に耕作権を重視すべきであると主張について。所有権は法的な問題であり、上部構造に属すると考え方は、根本的に間違っている。所有であれ、保有であれ、権利の蓄積を伴わなければ、弱き所有に過ぎず、自らの勤労の果実を守ることすらできない。所有の強さは生産関係の質を決定する。生産様式規定の根幹をなす所有形態における所有を問うためには、まず所有権を問題にしなければならない。

ムキーマも、下位カーストへの雑役 menial labor の押しつけについて述べているが、インドにおいて重要なことは、下位カーストの土地に対する権

利の弱さである。これは、「共同体」が「共同体のための賦役労働」を下位カースト（共同体が丸抱えしている劣位の者）に押しつけたことと関係がある。このような負担の押しつけは、共同労働における協働連関の可視性を低下させ、社会の低信頼化をもたらすとともに、低信頼状態持続の主たる要因ともなったと考えられる。

Miomir Jakšić (1981) は、接合論の堅固な基礎としてのアジア的生産様式を主張したものである。Jakšić のアジア的生産様式概念は、テーケイ、メロッティ、クレーダーなどの理解にほぼ合致したものである。「上位の共同体 higher unity は、村落共同体をこえて存在し、それらを統一し、その生存の前提条件（道路、灌漑）を作り上げ、それに基づいてその再生産を可能にするところの剰余生産物を〔農民から〕取り上げた。マルクスが書いているように、この利害の相互性こそが何故アジア的生産様式がもっとも堅固で、もっとも持久性があったのかを説明している」（Jakšić, p. 86）。

Jakšić は、文頭において、本論文集のテーマともいうべき第三世界の歴史展開に即した歴史理論の構築とエスノセントリズム（ヨーロッパ中心主義）批判を念頭におきながら、ヨーロッパ・モデルに沿った資本主義の文明化作用とその使命に対抗する発展途上国の歴史理論として、マルクスの生産様式論の有効性を主張する。その発展途上国の歴史と社会の相貌を理解するのにもっとも有効だとする生産様式論の中核にアジア的生産様式論が位置している。ヨーロッパ的な歴史発展とは異なった道を歩む非ヨーロッパ的世界における独得な性格を形作っているもの、それ即ちアジア的生産様式なのである。それゆえ、ヨーロッパが封建的生産様式から内発的な発展により資本主義的生産様式への変革をなしとげたのに比し、非ヨーロッパ的世界においては、その古い生産様式の堅固さと持久性のために、内発的な発展ではなく、外からの刺激によって資本主義的な発展へと導かれていくことになる。おそらくは、ピエール・フィリップ・レーによる『階級同盟』の影響を意識しているのだと思われるが、外から浸入した資本主義とアジア的社会の古い生産様式

は長期にわたり共存し、絡みあい接合し、独特の社会構成を形成しつつ、ゆっくりと変化し質的転換を遂げていく。伝統的生産様式自身の内在的な発展は、接合およびその質的転換に影響を与える。Jakšić は著名な、資本主義生産にとっての商人資本の役割、あるいは高利貸資本の古い生産様式の分解に対する役割、などのマルクスのパラグラフを引用しつつ、上記の接合論の視角が、すでにマルクスに内包していたことを明らかにしている (p. 80)。非ヨーロッパ的世界においては、ウエスタン・インパクトなしでは資本主義的発展は起きないとまで語る Jakšić のこのような確信がどのような史料、あるいは学的系譜や蓄積によって支えられているのかについて知るには、残念ながら、彼の論文は短すぎるようである。

Jakšić は旧ユーゴスラビアのマルクス主義者であった。東欧におけるアジア的生産様式研究に関して、1960年代においては、チェコスロヴァキア、ハンガリー、ポーランドなどの学界の動向が、西欧の雑誌などにも時おり伝えられていたが、その後、情報らしい情報はほぼなくなる。スラブ圏のマルクス主義者にとって、オスマン帝国のバルカン占領やロシア帝国の西漸により、東洋的専制主義に対する実感は、我々の想像以上にセンシブルなものだったと思われる。スラブ圏以外において、スラブ系諸語に通じた研究者が少ないという難しい問題があるが、東欧の研究動向にもう少し光が当てられることを願うばかりである。

3) 水の理論へのなだらかな回帰

アジア的生産様式にとって、水は特別な意味をもっていた。戦前のマジャール、ウィットフォーゲルの中国経済史、中国農業に関する著作は、多くの批判を受けながらも、つねに高い評価を受けていた。それは、誰もが感じていたアジア的社会のヨーロッパ社会との相違、とくにアジア的社会の農業の特質を明らかにせんとしたものであったからである。

だが、1957年、ウィットフォージェル『オリエンタル・デスポティズム』の出版以後、事態は大きく転換する。水の理論が今や反共理論として新たな装いをつけて登場した以上、マルクス主義者にとって水を扱うことは難しくなった。そればかりか、マルクス主義者ではなくとも、その影響を受けた知識人、リベラルな立場を取る研究者たちも、同じような困難を感じるようになった。

一方、考古学、人類学、地理学をフィールドにする研究者たちにとっては、水利を強引に政治システムに関連付け、政治的プロパガンダに加担したウィットフォージェルのスタイルは、科学的な研究活動に不必要な、過剰な負担をかけるものとして、強い反感を呼ぶことになった。その結果、政治に無縁な領域においても、水利をテーマとして扱うことは、予期せぬ批判を招きかねず、相応のリスクを伴うことになった。

だが、水は農業にとって根幹をなす。人間が農業に依存するかぎり、農業にとって不可欠な水をどのように獲得するかについて、人間が関心をもたないなどということは本来ありえないことがらである。ただ、それが天水で十分な場合、必要なものとしての優先順位が下がり、不可欠なものとして特に意識されてこなかっただけであった。

このような厳しい時期、長期にわたり水の理論を探究し続けたマルクス主義者の一人としてスリランカのグナワルダナがいる。マルクス主義者として、長くウィットフォージェル「水の理論」批判を続けたグナワルダナの「水」へのアプローチを検証してみたい。グナワルダナ（Gunawardana, 1971）はまず、古代セイロンを国家主導による大規模水利事業によって王国の中核地域の農業が支えられていることを認め、これを水力社会であったと認める。すなわち、ウィットフォージェルの水の理論の基本的な部分を認めている。たとえば、3世紀後半に築造されたミネリア・タンクは4,670 エーカー（18.9 km²）の大きさを誇る。あくまでも表面積だけの比較であるが、諏訪湖（12.9 ha）よりも大きく、如何に巨大であるかがわかる。日本と同様、大河

川の存在しないスリランカにおいて、灌漑の主力はマハーヴェリ川とカラー川の二つの水系とそれに連結している多数のメガタンクであり、さらにメガタンクを含め無数のタンクが相互に連珠し、二つの主要河川を軸にそれぞれ大規模な灌漑ネットワークを構成している。この二つの灌漑ネットワークにカバーされた農業地帯こそが古代国家を支える中核地域であった。これらをみれば、やはり水力的 hydraulic であると言わざるを得ない。

だが、このような水力的な農業社会を基盤とした古代国家は、僧院経済の発展、および地方有力者の政治力の上昇によって、政治権力は多元化（多中心化）していく。グナワルダナは、そこに水力社会の封建化、西欧に類似した中世への展望を見出そうとしている。

グナワルダナ（1979）は、僧侶集団（サンガ）および僧院経済の詳細な検討を通じて、王とサンガ（僧団）、あるいは有力僧院の関係の変遷を跡づけている。インドやスリランカなどにおいては、僧院や僧団は、僧侶が生業に従事せず、直接生産に携わらないことから、もっぱら宗教史的・文化史的な側面からのみ考察されてきたことに対し、同書は社会経済史の視角から僧院および僧団を取り上げ、その社会的なあり方と役割、王権（国家）との関わりを明らかにせんとした、非常な意欲作である。王は僧院および僧団を庇護し、彼らに土地（灌漑つき）および人民を付与する。それに対し、僧院および僧団はその教義と仏教儀礼を通じ、王を神聖なるものとして王の權威を高め、王を中心としたヒエラルヒーを明確化する。すなわち僧院および僧団は王権の宗教およびイデオロギー機能を担っている⁷⁾。

僧院は下賜され灌漑地を中心として、さらに富（水と土地）を蓄積し、直接生産者である共同体農民から、小作人が地主に地代を収めるように、「領主」としてその余剰を収めさせる。僧院資産は世俗資産とは異なり相続による分割を免れているため、彼らの水と土地の集積は、地方経済に大きな位置を占めるようになる。グナワルダナは、このような僧院経済の発展を、王権から相対的に分離していく過程として捉え、中世封建社会への転換を跡づけ

ているかにみえる。

グナワルダナ（1981）は、もっぱら国家の形成と水利社会の関わりを論じたものである。紀元前におけるスリランカ各地のプリミティブな政治支配である首長制の段階から、灌漑や溜池（貯水池）など水利事業の役割が果たした役割と、それが政治支配へ及ぼした影響が相互に関連して述べられ、古都アヌラダプラを中心としたドライゾーンの水利に利害をもつ政治集団が登場し、その水の供給を受ける農民たちから受取る農業の余剰が、その集団の政治支配を強化し、さらには、アヌラダプラの王のもとに、各地の首長とそれに率いられた共同体農民が統合されていく過程が述べられている。グナワルダナは、上記の叙述のところどころで、ウィットフォーゲル批判を展開している。だが、灌漑が安定した農業生産をもたらし、その余剰が水の供給者たる灌漑の組織者（首長や王）の政治支配を強化するとしているように、彼は灌漑と政治支配（国家形成）の関わりを否定しているのではない。それはむしろ、灌漑の必要が国家を発生させる、あるいは水が専制権力の基礎であり、かつアジア的社会を長期にわたって停滞せるといったウィットフォーゲル「水の理論」における極端な仮説あるいはグロテスクといえるほど過度に強調された部分⁹⁾（それは結局、ウィットフォーゲル仮説の弱点となっている）を取り除き、ソフィスティケートされた水の理論ともいべきものを提供しているかのようにみえる。考古学者ジュリア・ショーは、サンチーなどの仏教遺跡の発掘から、インドの僧院の営為と灌漑の関わり明らかにしつつあるが、彼女の先行研究としてグナワルダナ（1979）を挙げているのも、その辺に由来していよう。

グナワルダナ（1985）は、古代セイロンについては、やはり水力社会であることを認める一方、古代から中世への転換に関して、権力の分掌 sharing of power なる概念を新たに提起し、その転換の過程を意欲的に実証しようとしている。権力の分掌 sharing of power に関するグナワルダナの議論とそのスリランカ史における位置づけは、日本史でいえば「権門体制論」の提

起（黒田俊雄）を巡る状況に似ているといえそうである。

だが、日本史研究における詳細な寺社の経済、とりわけ荘園経済の変遷の実証研究に相当するような、社会経済史研究は行なわれていない。それゆえ、王から有力僧院へのインムニテートの授与が重ねて強調されていても、寺院・僧院の政治的・経済的な自立のプロセスとして理解することはできない。王は僧院に田地や灌漑施設を賜与し、それにインムニテートを授与したとしても、その土地や農民に対する保護を当然のごとく自らの任務だと考えているように見える（Gunawardana, 1985: p. 242）。結局、その分掌とは、むしろ王権内部における、宗教機能・イデオロギー機能の分掌としか受け取れないであろう。また、首長層、あるいは地方豪族層の台頭も、それぞれの経済的な内容に関しては、地主・小作制度と貿易ぐらいにしか言及しておらず、具体的な内容に乏しく、政治的・軍事的にはともかく、経済的・社会的には、その実体はひどく漠然としたものにすぎない。ただ、中国歴代王朝史の研究においては、皇帝と寺観勢力のとの権力の分掌などといった問題意識すら持ちえないほど力関係に差があることを考えると、先の「権力の分掌」をめぐるグナワルドナの提起は十分に検討に値するものだといえる。

4) ウィットフォーゲルの死と 20 世紀社会主義の終焉

1988 年、ウィットフォーゲルの死と、1989-91 年にかけてのソ連・東欧圏の崩壊とともに、アジア的生産様式に関する議論も下火となる。だが、それ以後も細々となされた議論から、アジア的生産様式否定論がほぼ消失したことが顕著である。すなわち、何が何でもアジア的生産様式概念を否定したい勢力が、一体誰であったかが、ここに、明らかになったといえる。

ウィットフォーゲルの死およびソ連＝東欧圏崩壊によって、イデオロギー的な重しがとれ、様々な「水」についての研究が登場する。1990 年代には、水の理論の継承を公言するものも現れる。

ミャンマー中央高地の水利を論じた Michal Aung-Thwin（ビルマ, 1990）は、植民地以前における水の役割を再評価することにより、水と政治支配との関連を問うものであり、1990 年以降の「水の理論」の世代に繋がる著作であった。Aung-Thwin は、その「注」において、おずおずではあるが、ウィットフォーゲル仮説の有効性を示唆している。ウィットフォーゲル・パニック以来、長く閉ざされてきた政治権力と水との関わりに関する探究が、ようやく始まりつつあることを感得させるものとなっている。

1991 年にデンマーク語で発表され、1993 年に英訳されたクリステンセン『イランシャーの衰退』（イランシャー：ササン朝）はメソポタミアおよびイラン高原の人工灌漑史の大著であるが、中東を舞台としたアジア的生産様式論や東洋の専制主義論にとって到底無視しえない内容を持つ、すぐれた労作である。同時期、それとは対照的に、ウィットフォーゲル仮説の盲点である小水系の水利事業の意義について、水利社会における「水を介した連帯」hydraulic solidarity の存在を検出したランシング Lansing（1991）のバリ水利論が登場する。農業と農業社会における水の意義について、多種多様な、実証的かつ理論的な諸研究が続くことになる。

それらの多くはマルクス主義諸学との関わりをもたないものである。そして、そうである以上、アジア的生産様式論とはいっそう無縁のものであるようにみえる。だが、それらの諸研究において、一たび水利社会と政治支配との関係を問う時、意識しようとしまいと、アジア的生産様式の理論領域に接することになる。何故なら、その社会の成員が水を如何に制御しているかどうか問われるからである。とくに、水利施設が大きくなるにつれて、水利事業のための労働を誰が供出するのか、水利事業を誰が指揮するのか、そしてその果実を誰がどのように獲得し分配するのか等が、大きな問題となる。そこでは、共同体のための必要労働、あるいは共同体のための賦役労働、協働連関の可視性といった概念が基礎的な視座を提供するはずである。

《注》

- 1) ケスラー (Kössler, 1982) は第一次論争における主要な個々のテーマ——奴隷制や封建制などの敵対的社会構成の有無など——に関する議論を、中国の土地所有制度、官僚機構と郷紳層、国家の在り方などを考量し、詳述するとともに、アジアの社会論の立場から当時の論争をまとめた大作であったが、おそらくドイツ語で出版されたため、あるいは同じことだが、マルクス主義をめぐる論争の中心が英語圏に移っていたため、70年代中葉のクレーダー、ソーワー、メロッティのような評判を得ることなかった。
- 2) このような歴史的なパースペクティブの形成に、ティシュルマンは、ファン・ルールの「ローマからジャワまで、相互に関連した一つの貿易圏だった」との記述から大きなヒントを得ている。
- 3) だが、地域の統一はアジアの生産様式にとって偶発的な性質のものであり、基本的な指標ではない。
- 4) 政治支配成立のプロセスにおける宗教的・イデオロギー的要素を無視すべきではないのは当然である。それは、首長制や初期国家成立を促す要素としての、水利など公共事業や威信財の交易、あるいは異なる民族や文明の襲来といったものとして十分に両立可能なものである。ただ、筆者は、宗教的あるいはイデオロギー的なものと経済的なもの(物質生産に関するもの)を厳密に分けることに反対である。現在の立場からは、豊穡儀礼は無意味であるが、プリミティブな社会に住む人々にとって、銅鐸を小高い丘に埋め豊穡を祈願する行為や古墳の上から国見を行う行為もまた生産に関わる行為であったと考えるべきであろう。
- 5) 土地のゲルマン的所有から発展した封建の生産様式の本質とは、領主による土地所有から土地私有が形成されたのではなく、農民による土地私有として形成されたことである (Tökei, 1982: p. 301)。
- 6) バナージーは、農民の村落の共有地に対する土地(分与地)の要求を個人化 individualisation と捉え、それを共有に対する私的契機的发展と見なしているようであるが、分与地と国家もしくは地主への農民の労役義務は表裏一体のものである。また、インド村落においては、土地への権利はカーストへの帰属に媒介される。それゆえ、分与地の保有は農民分割地所有とは別物である。
- 7) グナワルダナの王権とサンガをめぐる議論は、アジアの生産様式のものでの国家と宗教の関わりを問うものとなっているが、グナワルダナは——筆者が読んだ論文にかぎって言えば——一度もアジアの生産様式について言及していない。彼の一連の著作における主要なテーマが、水力社会 hydraulic society と国家形成であること、さらに、中核地帯における大規模水利事業の展開とともに新しい生産様式が出現した (Gunawardana, 1981: p. 145) と述べているように、明確にマルクス主義的な生産様式概念を使用していることを考えるならば、言及の不

在は、とても奇妙に映る。

- 8) ウィットフォーゲル自身は、大規模水利にもとづく水力農業と、それに満たない規模の水利農業を明確に区別している。したがって、専制をもたらすものは、水力農業であり、水利農業ではない。水＝専制、あるいは水＝停滞といった通俗的な理解は、一部はウィットフォーゲル理論への誤解にもとづくものであると同時に、一部は、ウィットフォーゲル自身が水の理論を力説するあまりに、その意義を過度に強調したことによってもたらされた「後遺症」とも言うべきものから来ている。

文献リスト

- R. A. L. H. Gunawardana, *Irrigation and Hydraulic Society in Early Medieval Ceylon, Past and Present*, no. 53, November 1971.
- Jürgen Golte, *Modo de produccion asiatico y el Estado Inca*, *Revista Nueva Antropologia*, enero, ano/vol. 1, numero 003, 1976.
- David Elliott, *Thailand: Origins of Military Rule*, London, 1978.
- Henri J. M. Claessen & Peter Skalnik, *The Early State*, Mouton Publishers, 1978.
- Alec Gordon, *Stages in the Development of Java's Socio-Economic Formations, 1700-1979*, *Journal of Contemporary Asia*, Vol. 9, no. 2, 1979.
- R. A. L. H. Gunawardana, *Robe and Plough: Monasticism and Economic Interest in Early Medieval Sri Lanka*, University of Arizona Press, 1979.
- Jonathan Friedman, *System, Structure, and Contradiction: the Evolution of Asiatic Social Formation*, Nationalmuseum, 1979.
- N. C. van Setten van der Meer, *Sawah Cultivation in Ancient Java*, The Australian National University, 1979.
- Fritjof Tichelman, *The social evolution of Indonesia: the Asiatic mode of production and its legacy*, M. Nijhoff, 1980.
- Peter Junge, *Asiatische Produktionsweise und Staatsentstehung: zum Problem der logischen Analyse der Staatsentstehung in Klassengesellschaften mit Gemeineigentum*, Übersee Museum, 1980.
- Henri H. Stahl, *Traditional Romanian village communities: the transition from the communal to the capitalist mode of production in the Danube region*, Cambridge University Press, 1980.
- Henri J. M. Claessen & Peter Skalnik, *The Study of the State*, Mouton Publishers, 1981.
- Kurumi Sugita, *Terrestrial deities and celestial bureaucrats: transformation of the state and local communities in the Asiatic mode of production*, in *The Study of the State*, 1981.

- R. A. L. H. Gunawardana, Social Function and Political Power: A Case Study of State Formation in Irrigation Society, in *The Study of State*, 1981.
- Joel S. Kahn and Josep R. Llobera (eds), *The Anthropology of Pre-Capitalist Societies*, Macmillan, 1981.
- Anne M. Bailey and Josep R. Llobera (eds), *The Asiatic mode of production: science and politics*, Routledge & Kegan Paul, 1981.
- René Gallissot (ed.), *Structures et cultures precapitalistes: actes du colloque tenu à l'Université Paris VIII Vincennes*, Paris: Anthropos, 1981.
- F. Tichelman, Thèses sur le mode de production asiatique et l'exemple de Java, in *Structures et cultures precapitalistes*, 1981.
- C. Scalabrino, Histoire cyclique et histoire linéaire: Mode de production, formation sociale et histoire du Viêt-Nam ancien, in *Structures et cultures precapitalistes*, 1981.
- Yaranga Valderrama, Formation pré-capitaliste dans la civilisation andine, in *Structures et cultures precapitalistes*, 1981.
- S. Yerasimos, Le mode de production asiatique et la société ottomane, *ibid.*
- Y. Sertel, Les interprétation de l'évolution et de la structure de la société turque, *Structures et cultures precapitalistes*, 1981.
- Nikki R. Keddie, Structures précapitalistes dans le Moyen-Orient, *Structures et cultures precapitalistes*, 1981.
- D. Ben Ali, Essai d'identification du mode de production au Maroc précolonial, *Structures et cultures precapitalistes*, 1981.
- Homa Katouzian, *The Political Economy of Modern Iran, Despotism and Pseudo-Modernism 1926-1979*, New York University Press, 1981.
- Nancy Wiegiersma, The Asiatic Mode of Production in Vietnam, *Journal of Contemporary Asia*, Vol. 12, No. 1, 1982.
- Ferenc Tökei, Some Contentious Issues in the Interpretation of the Asiatic Mode of Production, *Journal of Contemporary of Asia*, no. 3, vol. 12, 1982.
- P. B. Mayer, South India, North India: The Capitalist Transformation of Two Provincial Districts, in Alavi & etc. *Capitalism and Colonial Production*, Croom Helm, 1982.
- Donald Crummery and C. C. Stewart (eds), *Modes of Production in Afirica: The Precolonial Era*, Sage Publications, 1982.
- Reinhart Kössler, *Dritte Internationale und Bauernrevolution: die Herausbildung des sowjetischen Marxismus in der Debatte um die "asiatische" Produktionsweise*, Frankfurt, Campus, 1982.
- Anupam Sen, *The state, industrialization and class formation in India*,

- Routledge & Kegan Paul, 1982.
- Dieter Eich, *Ayllú und Staat der Inka: zur Diskussion der asiatischen Produktionsweise*, 1982.
- Stephen Porter Dunn, *The fall and rise of the Asiatic mode of production*, Routledge & Kegan Paul, 1982.
- Baren Ray, *India: Nature of Society and Present Crisis*, Intellectual Book Corner, 1983.
- H. Lubasz, Marx's concept of the Asiatic mode of production: a genetic analysis, *Economy and Society*, November, 1984.
- R. A. L. H. Gunawardana, Intersocietal Transfer of Hydraulic Technology in Precolonial South Asia: Some Reflection Based on a Preliminary Investigation, *東南アジア研究*, 22(2), 1984.
- Alfredo Barrera Rubio (ed.), *Modo de produccion tributario en Mesoamerica*, Universidad de Ukatan, 1984.
- Karl W. Butzer, Irrigation Agrosystems in Eastern Spain: Roman or Islamic Origins?, *Annals of the Association of American Geographers*, 74(4), 1985.
- Kate Currie, Marx, Lubasz, and the Asiatic Mode of Production: A comment, *Economy and Society*, Vol. 14, no. 3, 1985.
- Claessen & Van de Velde (eds), *Development and Decline*, Bergin & Garvey Publishers, 1985.
- R. A. L. H. Gunawardana, Total Power or Shared Power?: A Study of the Hydraulic State and its Transformation in Sri Lanka from the Third to Ninth Centuries A. D., in Claessen & Van de Velde (eds), *Development and Decline*, 1985.
- T. J. Byres & Harbans Mukhia (eds), *Feudalism and non-European societies*, Frank Cass, 1985.
- Wim Ban Binsbergen and Peter Geschiere (eds), *Old Modes of Production and Capitalist Encroachment: Anthropological Explorations in Africa*, KPI, 1985.
- Diptendra Banerjee (ed.), *Marxian theory and the third world*, Sage Publications, 1985.
- Diptendra Banerjee, In search of a Theory of Pre-capitalist Modes of Production, Diptendra Banerjee (ed.), *Marxian theory and the third world*, 1985.
- Terrell Carver, Marx and Non-European Development, in *Marxian theory and the third world*, 1985.
- Miomir Jakšić, Marx's Theory of Production: Problems of Colonialism and Underdevelopment, in *Marxian theory and the third world*, 1985.
- Harbans Mukhia, Marx on Pre-colonial India: An Evaluation, in *Marxian theory*

- and the third world*, 1985.
- Haasanuzzaman Chowdhury, *Underdevelopment, state and mode of production in Bangladesh: a sociological outline*, Minerva Associate, Calcutta, 1985.
- Jan Wisseman Christie, *Theatre States and Oriental Despotism: Early Southeast Asia in the Eyes of the West*, The University of Hull, Centre of South-East Asian Studies, 1985.
- Winfried Pohly, *Iran: Langer Weg durch Diktaturen, Geschichte und Perspektive*, Express Edition, 1985.
- John Clammer, *Anthropology and Political Economy: Theoretical and Asian Perspectives*, St. Martin's Press, 1985.
- Ansa K. Asamoah, *The Ewe of Ghana and Togo on the eve of colonialism: a contribution to the Marxist debate on pre-capitalist socio-economic formations*, Ghana Pub. Corp., 1986.
- Donald W. Treadgold, Soviet Historian's Views of the "Asiatic Mode of Production", *Acta Slavica Japonica*, Hokkaido University, no. 5, 1987.
- Janina Szatkowska, The Model of the Asiatic Mode of Production: Its Application to the Analysis of the Modernization Process in India, *Studies on the Developing Countries*, Poland, No. 2, 1987.
- Huri Islamoglu-Inan, *The Ottoman Empire and the World-Economy*, Cambridge University Press, 1987.
- M. Mehdi, A review of the controversy around the Asiatic mode of production, *Journal of Contemporary Asia*, Vol. 18, no. 2, 1988.
- L. S. Wassiliew, Was ist die "asiatische Produktionsweise?", *Sowjetwissenschaft: Gesellschafts wissenschaftliche Beiträge*, Heft 2, 1989.
- Brendan O'Leary, *The Asiatic mode of production: Oriental despotism, historical materialism and Indian history*, B. Blackwell, 1989.
- Bula Bhadra, *Materialist Orientalism: Marx, Asiatic mode production and India*, Punthi Pustak, 1989.
- Michal Aung-Thwin, *Irrigation in the Heartland of Burma: Foundation of the Pre-Colonial Burmese State*, Northern Illinois University, 1990.
- J. Stephen Lansing, *Priests and Programmers: Technologies of Power in the Engineered Landscape of Bali*, Princeton University Press, 1991.
- Peter Christensen, *The Decline of Iranshahr: Irrigation and Environments in the History of the Middle East, 500 B.C. to A.D. 1500*, Museum Tusculanum Press, University of Copenhagen 1993 (デンマーク語初版, 1991).